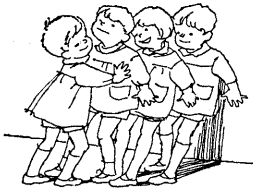


# 一学期の抱負とその展開

## 教師と幼児の人間関係を中心に



坂 倉 哉 子

### (一) 新しい幼児たちをむかえて

寄せては返す波のように、つい先日、わたくしのもとから去っていった子どもたちにかわって、また新しく、可愛い子どもたちが入園してくる新学期——、その子どもたちの期待と同じように、わたくしの気持も、期待と抱負で胸がいっぱいになるのです。

わずか一年というみじかい期間に、どういう子に育てて送りだしたらよいのだろうか、また、幼児たちのもちあわせの可能性をできるだけ見出してやって、幼児自身満足した成長発達をさせるには、教師として、どのように指導したらよいのか、ということを考えますとき、それは、やはり、教師と幼児の人間関係の中で、ひとりひとりの幼児が示してくれる要求——それは、発達によってたえず変化していくでしょうが——をひとつひとつ受けとめてやることによって、はじめて経験や活動が、幼児の本当のものになっていくのだと思います。

いいかえれば、ひとりひとりの幼児が、安定してあそべるようになるにも、また、ひとりひとりが、自己を満足させてあそぶことから、友だちの感情をも理解してあそべるようになるためにも、まず教師と幼児のあたたかいふれあいが前提となるのではな

いかと考えるのです。

でも、いままでの、わたくし自身をふりかえり、いろいろと反省しています。つまり、本当に、ひとりひとりの幼児が、自己を卒直に表出できるようなふんい気をつくってやったのだろうか。幼児たちを、ありのままに受け入れてやれるだけの気持のゆとりがあったのだろうか。自分の気持をおしつけることなく、幼児たちの要求に、気楽に、許容的に譲歩的な態度で応じてやることができただろうか。また、いろいろな場面につかる幼児たちの感情を、うまく受けとめることができたのだろうか、などです。

また、わたくしは、幼児たちの経験や活動を外面から追う傾向があり、活動が豊かになるようにと、幼児の活動にあわせながら、いろいろと物的な環境をととのえ、ひとりひとりがじゅうぶんあそべるような配慮をする中で、いっしょにあそんだり、動いたりしながら、活動がさらに発展するようになど活動の変化を追う面がたぶんにあるようでした。が、そういった面もたいせつにしなから、前述のような考えの上に立って、わたくしとしては、外からみてわかる活動の変化を追うのではなく、その活動を支えている基盤である内面の変化を、教師と幼児のふれあいの中でとらえ、たいせつにして、そのことが、幼児にとっては何げみになり、幼児たちを変化させていくようにと願うのです。

## (二) 一学期の展望

いろいろな場面で示す幼児たちの感情は、いろいろな意味をもっています。そのひとつひとつをどう受けとめてやらよいか、特に、入園当初の幼児たちは、新しい場に直面して、ひとりひとりが、さまざまな形で感情をうたえています。感じた通り行動に移す幼児もいますが、ときとしてひじょうにみわけにくいやり方で示している場合もあります。即ち、ことばによるコミュニケーションのできない段階においては、ことばで示す前に、視線により、あるいはからだ全体で感情をうたえている場合がありますので、感情と感情との通じあい、感情的なコミュニケーションが必要となるでしょう。

また、そのような消極的なたえととともに、『先生とあそびたい』とか『先生とはなしたい』などの積極的な要求もみられますので、そういった感情にもじゅうぶんこたえてやらなければなりません。

そして、それらの幼児たちの行動を通し、幼児はいま何を要求し、何をしたらよいかということ、幼児にじかにふれて判断しなければならぬと思います。

そうした教師とのふれあいがじゅうぶん満足できるようになれば、幼児たちは、気のあった友だちをみつけてあそびたいという要求をもつようになるでしょう。そして、その友だちとのふれあいの中で、お互いが求めあい、助けあえるような感情をだいに育ててやらなければならぬでしょうし、やがて数人の仲間に入ってあそびたいという要求をもつようになったとき、そこで起こるいろいろな問題も解決していけるような方向づけをしてやらなければならぬと思います。

どのような場面でも、やはり幼児たちの示す要求には、発達や個人差の条件がふくまれていますので、以上のような大まかな見通しを立てて、発達の条件によって異なる要求を観点としてとらえ、幼児の望ましいパーソナリティの発達というを中心として指導していきたいと思います。

### (三) 一学期の実践から

幼児は、欲求を満たしていくのに、親に依存的であると同じように、幼稚園においても自分の欲求を満たすためには教師に依存的になります。そして、その欲求が満たされた幼児たちは、次の段階に自由に進んでいく気持や、進んでも大丈夫だという安心

感をもつのではないかと思えます。

#### 先生といっしょにあそびたい

入園して十日目、窓から砂場の方をみると、ふたりの幼児がだまっておまんじゅうをつくっている。ふたりはお互いに話もしないで手を動かしているのので、「先生もいれてね」と大きな声でふたりにいうと、わたくしのそばにいた三、四人の幼児も「わたしもいこう」「わたしもいく」といって、腕にぶらさがりながら、いっしょに砂場についてきました。先からいたふたりに「NちゃんもTちゃんもいっしょにあそびましょ」ときそい、「先生、大きなお山つくってよ」というM子にこたえて、みんなで山づくりがはじまると、すべり台をしていたO夫やM夫、窓からみていたH夫、U夫も集ってきて、人数がたくさんになった。教師が大きなシャベルでベタンベタンと山をたたくと、みんなも同じようにベタンベタンとまねてよろこんでいるのです。

低くなっているところは、池だとか、海だとかいっているの  
で、「じゃお水をくんできてあげるわね」というと「わたしもくんでくる」「わたしも」「わたしも」といってみんなが教師のあとからぞろぞろとついて水をくみにくる。なんべんもなんべんも水をはこんでいるうちに、Y子がはしってころんでしまった。

「お部屋でお薬をつけてきましょうね」といって、Y子を部屋につれていくと、教師のあとについてきて「先生早くきて」「はよきて」といって教師を求めているのです。「いますぐいくから、みんなで作ってね」といっても教師がくるまでテラスで待っているのです。

これは、入園当初の一場面ですが、お互いにまだ結びつきができていないために、友だちどうしであそぶことが不可能であることがよくみられます。そのために、教師に依存的存在であり、ひとりひとりが教師とあそびたいという要求をもっていますが、それは、教師がまだ幼児ひとりひとりの感情を、じゅうぶん受容していないという不安定さから起る問題でもないのではないかと思えます。

だから、こういった幼児の積極的な感情を受け入れて、満足させてやり、幼児たちのあたたかく親しみのある感情に応じてやることにより、幼児たちは安定し、自信をもって友だちとあそべるようになるのではないかと思われまます。

先生がそばにいてほしい

入園当初から、そうとうS夫には交渉をもったつもりでしたが、それでも、すっかり園生活になじむことができないのか、いろいろな場面につづかるたびに、不安感がのこっていて、教師

とのふれあいを求めているようです。

警戒心の強いS夫は、反面、他人のやることがひじょうに気になります。五月のはじめ、みんなでピアノのリズムに合わせてかかっていると、うしろの友だちがS夫の肩にちょっと手をかけたたん、S夫はおされたようなかっこうで倒れてしまい、手足をばたばたさせ、かんすじを立てて泣きわめいているのです。うしろのO夫も別に意識して倒したわけでもないのに、どうしようかというような顔つきでつつ立っていました。「Oちゃん、ごめんねって先生といっしょにあやまりましょうか」というとO夫もすなおに「ごめんな」といいましたが、S夫はそんなことに全然反応なく、まだがまんでできないとみえて泣きわめいているのです。

みんなもよってきて「Sちゃん泣かんときな」などといってとりまいていますが、なんといっても効果があるものではないと思ひ、みんなに帰宅の準備をさせ、「さ、Sちゃんもおかばんかけましょ」とかばんをとってかけてやると、かばんの中から、自分の作った紙ひこうきをとり出して、両足でふみつぶしているのです。みんなを帰宅させ、「おやおやSちゃんのひこうきこんなにくちやくちやになっちゃった」といってひろいあげ、「さ、先生Sちゃんといっしょに駅まで送っていくわね、いっしょにいきましょ」と靴をはかせ、S夫の肩をくみながら歩いていくと少しず

つ泣き止んでいきました。

一週間後に、はじめてのおべんとうの日がきました。S夫にあっては、やはり警戒心があり、みんながよろこびでいっぱいなのに、S夫は、「ぼくお弁当いらない」といって開けようとしません。やはり園の生活すべてにまだ安定感がもてないのです。ということは、わたくしがまだS夫の気持を、じゅうぶんに受け入れられていないからなのでしょう。

だから、S夫といっしょに行動することによって、不安感をとり除いてやろうと思いました。「先生といっしょにたべましようよ」といっても「いい、ぼくたべたくない」という。「でも、Sちゃんのおなかペコペコだ、ほらこんなに小さいもん」「先生もペコペコよ、早くSちゃんとたべたいな」とS夫のおなかをおさえてやりましたがしらん顔、みんなの前でお弁当を開けることがS夫にとって大きな抵抗なのだと思います、ままごとコーナーのテーブルのところへつれてきて、「ここで先生とたべましようか」といって開けてやると、よほどたべたかったのかさっさとたべはじめました。

S夫と別のテーブルで食事をするということは、他の幼児たちも先生といっしょにたべたいのだから……と思つて、みんなをみると、はじめてのお弁当とあつて、たのしそうに「これ先生!

サクランボはいつとつた」「ぼくチーズはいつとる」などといつてたかだかとお弁当をあげてみせているので、少しは安心しました。

家庭での生活しか経験していないS夫にとっては、幼稚園は、また経験していない世界がたくさんあり、その中で起こる障害や困難なできごとを、なかなかスムーズにのりこえていけないのです。ことあるたびにこういつた不安感が行動にあらわれ、教師を求めているようでした。教師としては、そういった場面につかつて対処していけるようなS夫にしてやらなければなりません。が、それには、いきなりことばでいつてわからせようとしても理解するものではないでしょう。やはり、ことばでわからせる以前の、感情と感情のふれあい、即ち、教師を求め、教師に依存してくるS夫の感情をじゅうぶん受け入れてやつてこそ、理解できるのではないかと思われます。

#### 特定の友だちをみつめてあそびたい

教師とのふれあいにじゅうぶん満足できるようにになると、友だちを求めてあそびたいという要求をもつようになってきます。

いろいろな場面で不安感のあらわれるS夫は、友だちのいなかつたことも一因であるようです。

ところが偶然的なきっかけで、気のあった友だちをみつけることができました。しばらくたったお弁当の日、偶然となりにすわったK夫で「ぼくきょうはバンやぞ」と積極的にはなしかけるK夫に、「ぼくもバンやわ」とつい、つられてはなしかけたことがきっかけで、コーヒー牛乳までいっしょだといってよろこんでいるのでした。急にふたりは親しみがわいたように、そして、今まで友だちが求められなかったS夫にとって、「ぼくにも友だちがいてくれたんだ」というよろこびをもって、今後も、自分からブロックキャップのケースを運んできて、K夫といっしょにロケットをくみたてながら、何かさかんに話をしているのです。このように、自分から進んで行動にでるといふS夫は、本当に大きな成長であり、よろこびでもあります。

やはり、幼児は、教師とのふれあいのもとに、一歩ずつ成長し、安定して友だちが求められるようになるのではないかと思われるます。そして教師がそばにいても、教師がいるのと同じ気持ちで、安定して友だちとあそび、自分を広めていくようにしてやらなければならないと思うのです。

みんなといっしょにあそびたい

ひとりあそびが満足できるようになると、だんだん友だちとい

っしょに、グループをつくってあそびたい、という要求をもつようになってくるのではないのでしょうか。仲間にひきずられてはいつてはいるが、自分の本当にしたいことをしていない幼児と、かなり自分のしたいことをしている幼児との差が目立ってくるようにもなっています。が一学期間は、一つの目標に向かってみんながあそんでいるというのではなく、集団にはいれるということと満足感をもっているものが大部分のようです。しかし、その集団に、はいりたくても入れてもらえない幼児にとっては、何となく不安定で、攻撃的にでたり、何とかしてそのグループにはいれる機会を、待っているようすがよくわかります。

H夫は、積木で潜水艦をつくっていたグループに、なんとかしていれてもらいたい、そういった要求が、攻撃的になり、潜水艦に向かって、戦争だといってBブロックをばんばん投げつけているのです。グループのものたちも、そういうH夫に向かって投げ返し、しまいにはH夫は逃避するような形になって、しょんぼりとブロックのかごの前にすわりこんでしまったのです。

「Hちゃんもあの子たちとあそびたいのね」というと、「うん」とすなおにうなずく、グループのみんなにH夫を入れてあそんでやってほしいとたのんでも、いま先刻までブロックを投げつけていたH夫を、すぐに受け入れてくれるだろうか、と少し案じなが

ら、「ねえ、Hちゃんもみんなといっしょにあそびたいのよ、だからあんなことしたの、みんなといっしょに入れてもらえたらあんなことしないできつとうまくあそべるわよ、いれてあげて」とたのむと、「でもさ、Hちゃんいつも、すぐ積木こわしてしまっもん、おもしろくないわ」といいます。

たしかにいつもみていると、そのことでもめているようです。それも別に意識してこわすのではなく、足がしっかりしないので、よろけてつまずきやすいH夫が、ちょっとのはずみにころんで積木が倒れたりすることが、グループのものたちには理解できないのです。

そして、せっかく作りかけたとりでなどを途中でこわされて、自分たちの思うようにならないので、H夫は受け入れてもらえないのです。「Hちゃんはこわそうと思わないんだけど、ときどき足がふらつたってこわれてしまうのよ、積木でなくって、ときどききどころぶとぎがあるでしょ、いれてあげて」とH夫が努力しても受け入れられない原因を、みんなにいつてきかせました。

はつきりと、足がわるいという目に見える欠陥でもないのに、みんなに理解させることはむずかしく、だまってみんなはH夫の足もとをみていましたが、グループの中心のC夫が「うん、ええよ」とH夫をむかえいれてくれました。

この場合は、こういったことで解決されても、これから先どうなるだろうと、内心自分が大きな問題をかかえたような気持ちになりました。このことでH夫は、「自分もみんなといっしょなんだ、いっしょにあそべる」という気持ちをもって、自信を得、要求が満たされたようでしたが、グループの幼児たちにとっては、H夫の存在をうとましく思わないだろうか、とても心配でした。

でも仲間に入れてもらえたH夫も、自分なりに、からだの動きをコントロールしているようすが、よくみられ、グループに入ってもらうことに、大変な努力をしているようでした。

こういった集団内の人間関係の問題は、いろいろな場面で見られますが、H夫のような友だちを、うけ入れてやれるように、ひとりひとりの成長を、どのように促してやったらよいのだろうか、そして、グループ内でお互いの人間関係が成長し、仲間どうし、お互いに理解しあえるようにするにはどうしたらよいのか、いろいろと問題があるようです。

二つこを通して友だちを広めたい

一対一、あるいは二、三人、あるいは数人と固定化した友だちとの結びつきができてくると、その上になつて、より広く友だちを知ろうとする要求をもつようになってきます。

しかし、何かのきっかけがなければ、なかなかそういう行った行動は現われず、凝集したグループのままで、あそびが続けられることもありますが、そのようなことを打ち破るためのきっかけは、やはり、幼児たちの共通の経験をもとにした怪物ごっこなどのような、幼児の生活そのものであるごっこを通して、友だちとの交流ができていくようです。

だから、こうしたごっこを通して、新しい友だちとあそびたいとか、不安な気持や、心配なことをためてみたいという気持を、はきださせる機会を、じゅうぶん与えてやらなければならぬでしょうし、教師は、こうした幼児たちの感情を認めてやりながら、友だち関係が広まっていくようにしてやらなければならぬと思います。

ただ乱暴だからなどという理由で、ごっこを禁止することは、友だち関係を広めたいという幼児の要求をも押さえてしまうことになりやすいのではないのでしょうか。

#### (四) おわりに

以上、前年度の実践の中から、教師とのふれあいの中で示している幼児の要求を、幼児の発達をおって、その一部を拾ってみま

したが、このように、いくつかの場面で示した幼児たちの要求を満足させながら、さらに発達し、変化していく幼児たちの要求を受けとめてやることにより、経験や活動がひとつずつ幼児のものになっていったように思うのです。そして、そういったひとつひとつの活動は、やはり、教師とのあたたかいふれあいのもとに、はじめて成り立つものであるように思いました。

だから、本年度は、昨年度の積重ねの上になつて、今までに気づかなかつた、また見落としていた場面での、いろいろな要求を、幼児とのふれあいの中でうけとめ、さらに深く、幼児の内面をみつめて、幼児を理解していきたいと思うのです。

それには、毎日の保育の過程の中で、

- ・ 幼児たちがどのような要求の表現をしているだろうか、また、それにどうこたえたらよいのだろうか。

- ・ 活動の発展を通して、幼児は、教師とどのようにふれあいを求めているのだろうか。

- ・ そのためには、幼児と幼児、幼児と教師との間のコミュニケーションはどのような形でなされ、発達していくのだろうか。

- ・ 幼児は、友だちをどのように求め、集団内で、どのように安定していくのだろうか。



・ 交友関係はどのような形で広がり、求められるか、そして、それをどのように促してやったらよいのか。

などといった面から、発達のにとらえ、幼児が満足な成長をするようにしたいと思います。特に入園当初の幼児とのふれあいを最もたいせつに考え、依存の要求をじゅうぶん満足させることにより、独立して自分から進んでいけるような幼児にしてやりたいと思います。

そして、集団の中であそびたいという要求が強くなったとき、その中にスムーズにとけこんでいけるような幼児になっているかどうかをもう一度たしかめ、ひとりひとりの幼児が、集団に適應していけるようにしてやりたいものです。

二期は、グループ内で、幼児がお互いの感情をどのようにしてみとめあえるか、またグループとグループがどのような要求のしかたで交渉をもち、うまくあそべるようになるかをとらえて、集団行動がうまくいくようにするための教師の援助を、幼児とのふれあいの中で考えて、実践していきたいと思います。その中で、幼児は、自分自身を本当に発現できるでしょうし、豊かなパーソナリティを形成していくことが可能になると思うからです。

(四日市市立泊山幼稚園)

## 第一八回 幼稚園教育実務指導研究会予告

期日 第一日 六月三日(火)

第二日 六月四日(水)

第三日 六月五日(木)

第四日 六月六日(金)

第五日 六月七日(土)

会場 お茶の水女子大学附属幼稚園

主催 お茶の水女子大学教育学部附属幼稚園内

幼児教育研究会

### 幼児教育講習会

日時 昭和四四年七月二二(火)～二五(金)日

午前の部 九、〇〇——一二、〇〇

午後の部 一、〇〇——四、〇〇

会場 お茶の水女子大学講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会